

平成 27 年度

ゼミ学生地域貢献推進事業成果報告書

平成 28 年 2 月

公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアム

浜松市天竜区佐久間町における地域づくりの方策の研究

——山香地区と城西地区を中心に——

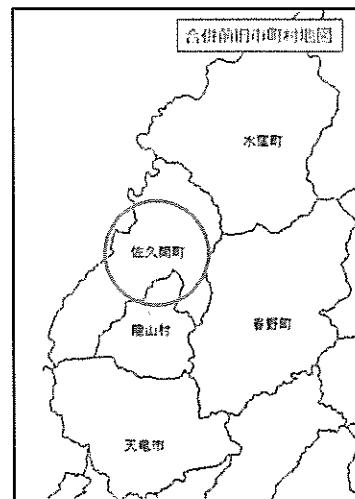
指導教員：静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 准教授：船戸修一

参加学生：堀絵莉華、山本尚徳（本学科3年生）

「農村社会学」を専攻する船戸ゼミでは、昨年度の浜松市天竜区龍山地域（旧・龍山村）の調査に引き続き、3年生のゼミ生（2人）とともに、2015年5月から2016年1月まで（8月は除く）週1回の頻度（合計30回）で天竜区佐久間地域（旧・佐久間町）の山香地区と城西地区の集落に赴き、自治会長をはじめ班や組の代表者、女性たちによる農産物加工グループの代表者、町外からの移住者など、様々な地域住民の方々から生活や暮らしの現状についての聞き取り調査を行った。また、この調査は、地元の祭りやイベントにも、教員と学生たちで参加するという「参与観察」に基づいたフィールドワークでもあった。さらに2015年12月には、佐久間地域の山香地区（227世帯）と城西地区（325世帯）における全552世帯を対象にしたアンケートを配布し、地域住民の意識や日常生活の状況についての調査を行った（アンケート結果については現在集計中）。

これまで佐久間地域（旧・佐久間町）では、佐久間ダムの建設（1953年着工、1956年竣工）・久根鉱山（1902年操業開始、1970年閉山）・大規模林業など近代資本集中型の地域開発を進めてきた。このような外部資本型の開発を導入してきたため、人口の急激な増加とその後の大型資本による開発撤退や一次産業の不振による大幅な人口減少を経験してきた（1955年は26,671人、2015年10月1日現在で3,953人）。山香地区では、2006年3月に山香小学校が閉校し、この地域から小中学校が消滅した。城西地区においても、2017年3月に城西小学校も閉校する予定である。このように両地区において地元小学校が消滅することによって、一層の人口減少が予想され、過疎問題が深刻化する可能性が高い。

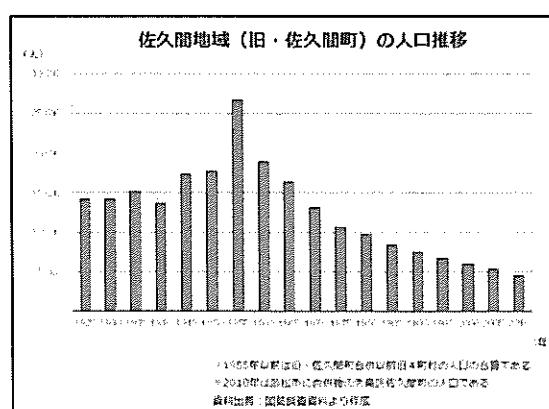
しかし一方で、山香・城西地区では、他出子——実家から転出した息子や娘たち——が頻繁に実家に戻り、場合によっては、近隣住民の生活をサポートしていることが聞き取り調査から分かった。そのため、仮に独居世帯であっても、この他出子からのサポートを受け続けることができれば、集落での生活は維持され、すぐに集落は消滅しない。よって、今後は、このような他出子が頻繁に出身集落に戻り、家族だけでなく、集落の共同作業や祭りに積極的に参加することによって集落の維持につなげることが求められる。昨今、65歳以上の人口が半分以上を占める集落を「限界集落」と呼び、その消滅可能性だけが強調される。しかし、集落の存続可能性は、年齢別の人口構成（高齢化率）ではなく、集落を越えた家族機能がどれだけ残っているかにかかっていることに気づかなければならぬ。



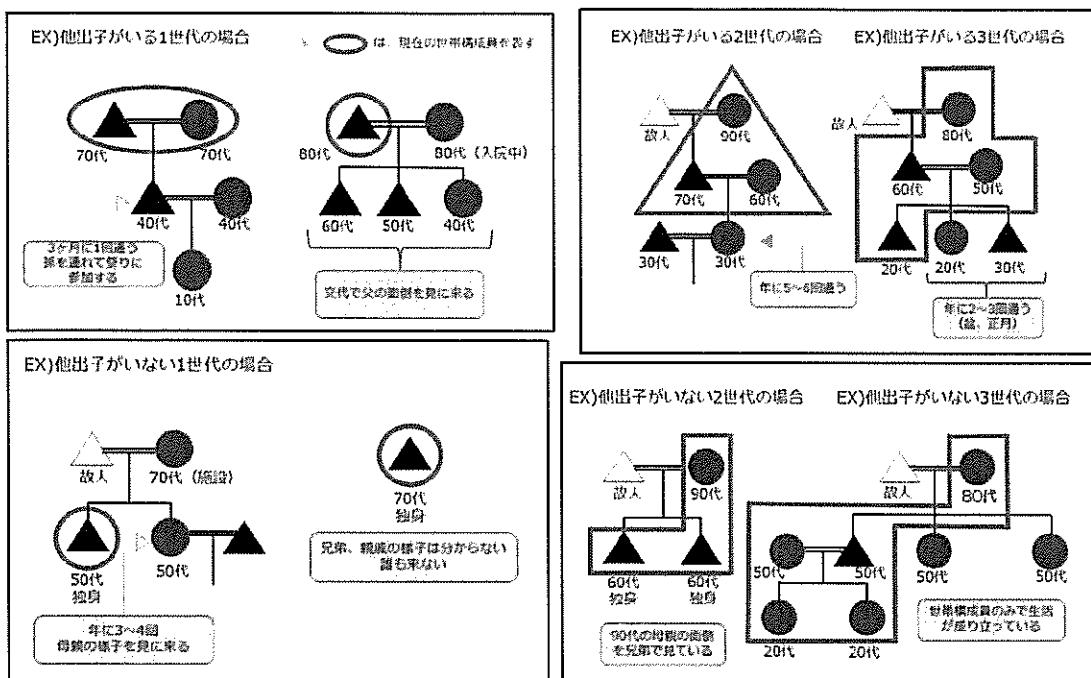
浜松市天竜区
佐久間地域（旧・佐久間町）の位置



山香地区と城西地区の位置



そこで、山香・城西地区において、どの他出子が実家の家族と関わっているか、さらに、これらの他出子がどれくらいの頻度で実家に通っているのかを明らかにするために、まず、他出子との関わりで主な家族構成のパターンを抽出した。その結果、①他出子がいる1世代パターンとして2種類、②他出子がいる2世代パターンが1種類、③他出子がいる3世代が1種類、④他出子がない2世代パターンが1種類、⑤他出子がない3世代パターンが1種類、⑥他出子がない1世代が2種類あることが分かった。その家族構成をまとめたものが以下の図である。



このように佐久間地域の山香・城西地区において人口は減少しているものの、集落を越えた他出子による家族へのサポートがあることが分かった(両地区における、①他出子の数、②他出子の居住場所、③他出子が実家に通う頻度、④他出子の実家や集落との関わり方についての調査結果は現在集計中)。このような家族機能が残っていれば、集落はそう簡単に消滅せず、むしろ、その維持可能性が見えてくる。

以上のような調査を踏まえ、山香地区の住民を対象に2016年2月22日(月)19時～21時、山香ふれあいセンターにおいて、また城西地区の住民を対象に2月23日(火)19時～21時、城西ふれあいセンターにおいて、浜松市の職員も招き、現地報告会を開催する。この報告会では、これまでの調査結果に基づき、山香・城西地区の現状を分析するだけでなく、課題解決策の提案や今後の地域づくりの方向性についても発表する。このように調査によって得られた知見を地元にフィードバックすることを試みるところにも、ゼミ活動の特徴がある。ゼミ生の中には、将来、中山間地域を抱える地域において公務員就職を希望している学生もあり、こうしたゼミ活動は学生のキャリアデザインに向けた実践的教育手法としても有意義であると思われる。船戸ゼミは「農村社会学」という専門性や調査手法を活かしつつ、調査結果を地域住民や行政(浜松市)に還元するという「大学・学生連携型の地域づくり」を目指すとともに、将来的に中山間地域を支える人材の育成も企図している。



佐久間地域の山香地区での聞き取り調査の様子
(2015年5月17日)

佐久間の暮らしの現状と今後の地域づくり

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科 船戸ゼミ 天竜区佐久間地域 山香地区・城西地区 調査報告会

静岡文化芸術大学 文化政策学部 文化政策学科の船戸ゼミでは、昨年5月から今年1月まで、浜松市の中山間地域である、天竜区佐久間地域（旧・佐久間町）の山香地区と城西地区の調査をしてきました。

佐久間地域は、同じ自治会でも、国道沿いに住んでいる方もいれば、標高の高いところに住んでいる方もおられます。そのため、地理的条件が異なれば、同じ自治会でも、住んでいる方々の考え方や意見も異なります。

そこで、なるべく細かいデータを収集するために、山香地区と城西地区の自治会の代表の方だけでなく、自治会の下部組織である「組」や「班」の代表の方70人への聞き取りも行い、集落の現状や課題について調査を行いました。また、山香地区の全227世帯、城西地区の全325世帯にアンケートを配布し、そこにお住まいの方々の意識についても調査を実施しました。

このような調査の結果分析を踏まえ、①「他出子（実家から転出した子ども）」と集落・実家とのかかわりの実態
②佐久間町外から転入する「移住者」をめぐる住民意識 ③人口減少から増加する「空き家」の実態とそれをめぐる住民意識 という3つのテーマから、課題解決策や今後の地域づくりについて、以下のような調査報告会を山香地区、城西地区それぞれで開催し、発表します。

ご興味のある方は、事前に、以下の問い合わせ先まで連絡したうえで、ご来場ください。

| | | |
|-----------|-------------------------|------------|
| 【日時と場所】 I | 平成28年2月22日（月） 午後7時～午後9時 | 山香ふれあいセンター |
| II | 平成28年2月23日（火） 午後7時～午後9時 | 城西ふれあいセンター |

【報告内容】

- ① はじめに：佐久間町山香・城西地区の調査概要 文化政策学科准教授 船戸修一
- ② 他出子と実家・集落とのかかわりと山香・城西地区の集落維持に向けて . . 文化政策学科3年 堀絵莉華
- ③ 移住者をめぐる意識と定住促進のための課題 文化政策学科3年 山本尚徳
- ④ 空き屋をめぐる意識とその利活用に向けて 文化政策学科准教授 船戸修一
- ⑤ おわりに：調査報告のまとめと今後の地域づくりの方向性 文化政策学科准教授 船戸修一

【料金】 無料

【申込み】 参加希望の方は 事前に 以下の問い合わせ先まで連絡してください

【お問い合わせ】

- 浜松市佐久間協働センター 担当：北野谷 Tel：053-966-0001
- 静岡文化芸術大学 地域連携室 Tel：053-457-6105 / Mail：chiiki@suac.ac.jp

「沼津市健康増進計画」の中間評価と計画書の見直し

常葉大学 健康科学部 静岡理学療法学科 栗田研究室

指導教員：助教 栗田泰成

参加学生：佐古あかり、小林昂央、本間海鈴、田中涼太郎、藤森拓磨、渡辺 遼、宇佐美 淩

連携研究室：常葉大学 経営学部 経営学科 村本研究室

要 約

「沼津市健康増進計画」の中間評価および計画書の見直しを目指し、平成 27 年度に沼津市民（以下、市民）の 20～64 歳を対象としたアンケート調査を行った。また、アンケート調査の運動関連項目を中心に平成 22 年度と平成 27 年度の比較分析を実施した。その結果、市民が運動に興味を持ち、運動実施者の割合や 1 日の運動時間が増加していることが明らかとなった。そして、今後は市民の中でも非運動実施者に対する取り組みが健康増進にとって有用であることが推察された。

I. 背景および目的

沼津市では“生涯健康！笑顔で暮らせるまちぬまづ”を実現するために、平成 23 年度より「沼津市健康増進計画」が策定された。そして、5 年後の平成 27 年度に、計画目標の達成状況評価や国・静岡県の行政施策動向、その他社会情勢の変化に即し見直しが実施された。この見直しでは、沼津市における効果的な健康づくり事業のあり方について、沼津市に居住する様々な年齢層の要望や状況に応じた計画の体系や推進のための役割を含めて検討されなければならない。そこで本研究の目的は、「沼津市健康増進計画」の中間評価および計画書の見直しを実施するためのアンケート調査を行い、健康と関連の高い運動習慣について分析し、今後の沼津市における健康増進計画に有用な基礎資料を得ることとする。

II. 方 法

市民を対象に食生活および運動、健康管理などに関するアンケート調査を実施し、平成 22 年度および平成 27 年度に行われたアンケート結果の比較より分析を行った。

1. 調査の対象：

1) 平成 22 年度（以下、①）

20～64 歳の市民の住民台帳から等間隔無作為抽出によって選出された 2229 名

2) 平成 27 年度（以下、②）

20～64 歳の市民の住民台帳から等間隔無作為抽出によって選出された 2100 名

2. 調査方法：郵送調査（説明書貼付）

3. 調査期間：①6月3日～7月8日 ②5月1日～6月12日

4. アンケート調査用紙の質問内容（大項目）：

対象者の属性、生活習慣や健康、運動、休養・こころの健康、たばこ・アルコール、歯・口の健康などに関する全30問

5. 運動に関する健康増進計画の実践：

「ながら運動」の指導と啓発活動、運動機能測定、体力作り教室、成人の健康づくりに関する教室、介護予防・ストレス対応の教室、指導者の派遣および地域リーダー育成、パパママ世代に運動のミニ講話（子育て世代に対する運動普及）、ママのためのボディメイク教室、各種スポーツ大会など

6. 分析：

統計処理ソフト（SPSS23.0 for Windows, IBM 社製）を使用し、①②の運動習慣などについて χ^2 検定、Mann-Whitney U 検定を行った。統計的有意水準は危険率5%未満とした。

III. 結果

1. 回収数

1) 合計 ①857名（有効回収率38.4%） ②654名（有効回収率31.1%）

2) 性別 ①男性：386名 女性：471名 不明・無回答：0名
②男性：312名 女性：340名 不明・無回答：2名

3) 年齢（平均年齢、標準偏差：①45.0±12.5歳 ②46.7±12.5歳）

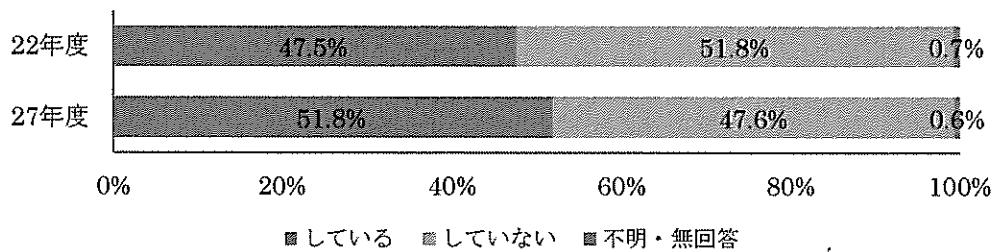
| | | |
|------------|-----------|------------|
| ①20歳代：124名 | 30歳代：176名 | 40歳代：194名 |
| 50歳代：228名 | 60歳代：135名 | 不明・無回答：0名 |
| ②20歳代：80名 | 30歳代：107名 | 40歳代：157名 |
| 50歳代：168名 | 60歳代：131名 | 不明・無回答：11名 |

4) 職業

| | | |
|---------------------|---------------------|-----------|
| ①農林漁業：8名 | 勤め人（会社員・公務員など）：383名 | 自営業：73名 |
| アルバイト、パート、派遣など：155名 | 学生：17名 | 専業主婦：149名 |
| 無職：43名 | その他：27名 | 不明・無回答：0名 |
| ②農林漁業：9名 | 勤め人（会社員・公務員など）：322名 | 自営業：54名 |
| アルバイト、パート、派遣など：119名 | 学生：11名 | 専業主婦：81名 |
| 無職：40名 | その他：12名 | 不明・無回答：6名 |

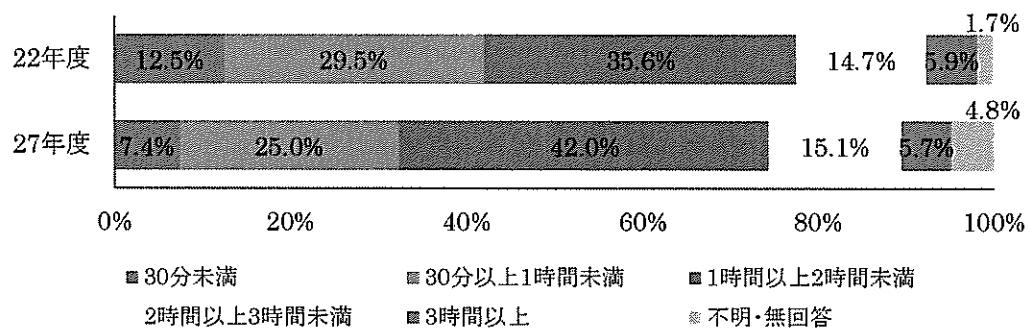
2. 分析結果（運動関連項目）

問3 日常生活で体を動かすことについてお聞きします。日常生活で、毎日60分くらい体を動かしていますか。



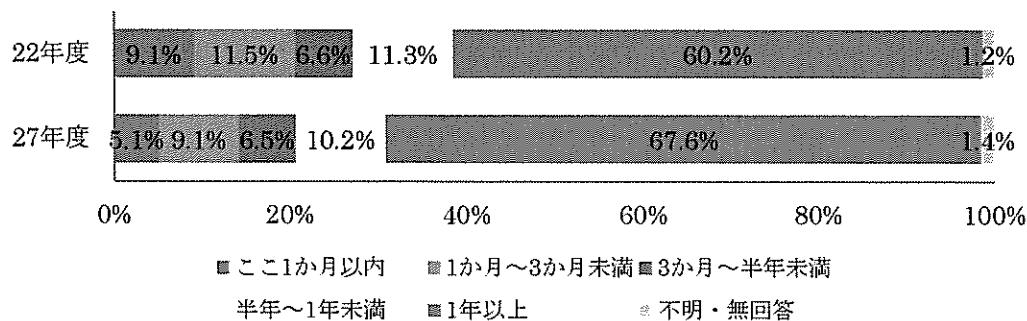
運動の実施にて、平成27年度の「している」が増加、「していない」が低下していた ($P < 0.01$)。

問5 運動をする日の1日の平均運動時間をお教えてください。1日に数回に分けて運動する人は、合計した時間をお書きください。



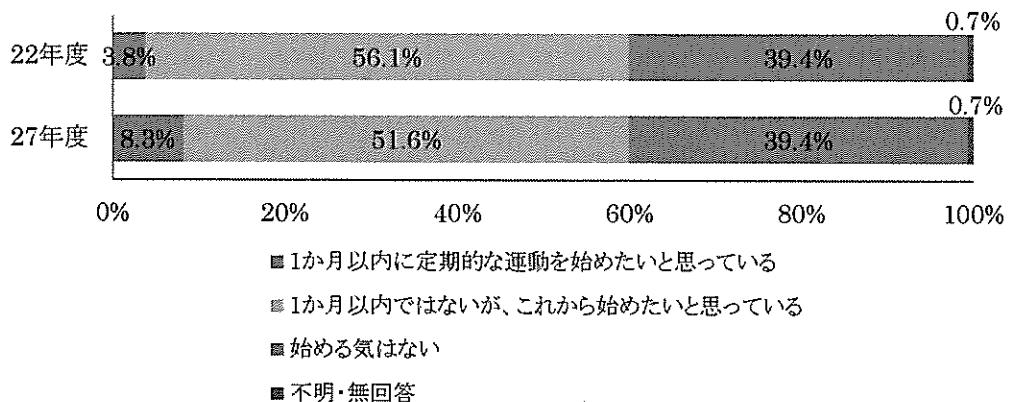
1日の平均運動時間にて、平成27年度の「1時間以上2時間未満」が増加、「30分未満」、「30分以上1時間未満」が低下していた ($P < 0.05$)。

問6 その運動はどのくらいの期間続けていますか。



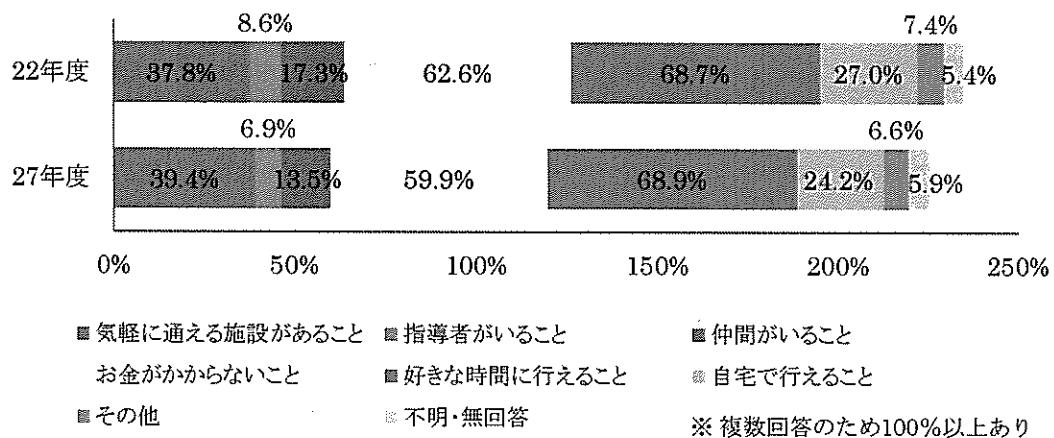
運動期間にて、平成27年度の「1年以上」が増加、「ここ1か月以内」、「1か月～3か月未満」が低下していた ($P < 0.01$)。

問8 これから運動を始めたいと思いますか。



運動を始めたい時期にて、平成 27 年度の「1 か月以内に定期的な運動を始めたいたと思っている」が増加、「1 か月以内ではないが、これから始めたいたと思っている」が低下していた ($P < 0.05$)。

問9 運動を始めるための条件は何ですか。



運動を始める条件にて、平成 27 年度の「気軽に通える施設がある」、「好きな時間に行えること」が増加 ($P < 0.01$)、「指導者がいること」、「仲間がいること」、「お金がかからないこと」が低下していた ($P < 0.05$ 、 0.01)。

その他、運動関連項目の問 2 自覚的健康感、問 4 運動回数（日/週）、問 7 運動の種類について差はなかった。

IV. 考 察

アンケート結果より平成 27 年度では平成 22 年度に比べ、運動実施者の割合や 1 日の運動時間が増加している。これは沼津市の健康増進計画により、各年代への啓発活動や運動関連事業を行った結果であると考えられる。また、問 9 運動を始めるための条件では「気

軽に通える施設がある」、「好きな時間に行えること」が増加していることから、運動を気軽に、好きな時間に実施できる施設があれば自主的に運動を実施する市民の増加が期待できると思われる。

問7 運動の種類や問8 運動への意欲において「始める気はない」などに差がなかったことから、今後は非運動実施者に対する運動を啓発する取り組みが課題であると推察する。

V. 今後の課題と計画（地域への提言）

沼津市がこれまで行ってきた“生涯健康！笑顔で暮らせるまちぬまづ”を事業目標とした健康増進計画の取り組みは、5年間で運動関連事業の効果が認められ、運動実施者の割合や運動時間の増加を実現していると考える。

そして、今後は市民の中でも非運動実施者に対する改善策に着手する必要性があると思われる。更に市民の健康を増進するために対象となる市民、特に非運動実施者が運動に求めるニーズや疾病との関連などについて検討し、具体的でより効果的な健康づくり事業の在り方を提案することが今後の課題である。

参考資料

表 沼津市健康増進計画（平成27年度に行われた主な運動関連事業）

| 施 策 | 事業内容 |
|---|---|
| ①運動のきっかけづくりの提供と運動の継続の支援 ②運動に関する情報の発信と知識の普及啓発 | 「ながら運動」啓発の講話 |
| | ボディメイク教室の継続と、教室に参加者への健康度測定および運動指導を実施 |
| | 足指力チェック、立ち上がりテストなどの測定および解説を実施 |
| | 運動体験や筋力チェックコーナーを実施（歯のイベント） |
| | 運動開始のきっかけとなるミニ講話や運動体験を実施（育児教室、体操教室などに参加した母親へ） |
| | 骨密度測定や体組成測定および解説・運動指導を実施 |
| | 各種体力作り教室、スポーツ大会などを実施 |
| | その他啓発活動：イベントや体操教室でのチラシの配布、イベントにおける体験型の運動普及、ホームページおよびFacebook掲載、FMぬまづなどで紹介 |

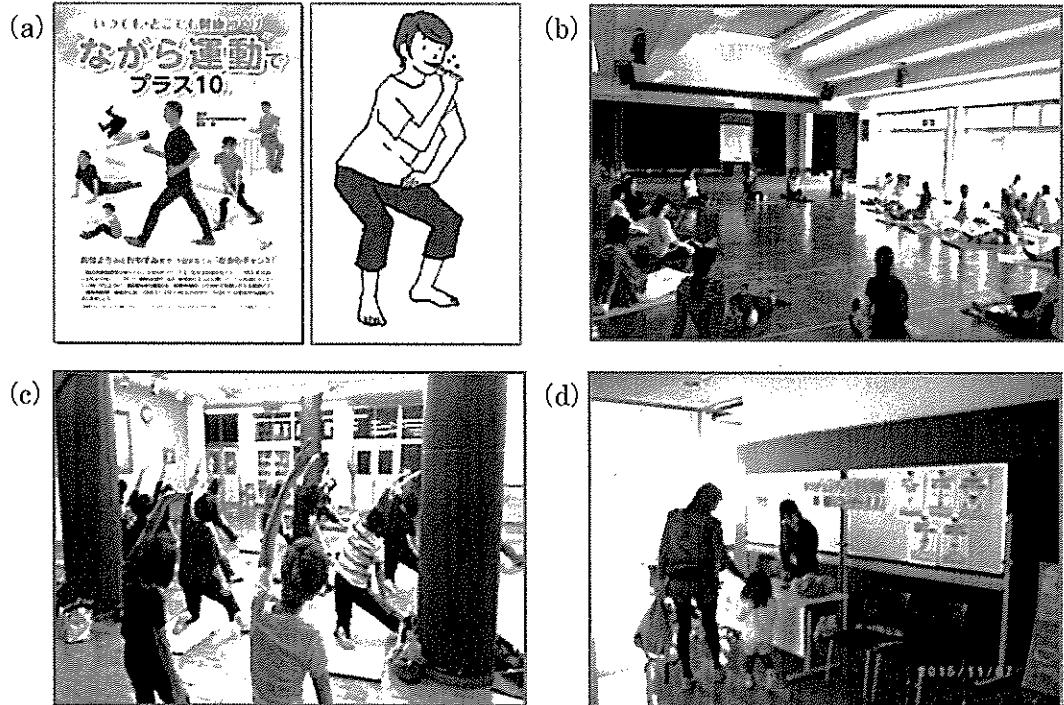


図 沼津市健康増進計画の主な運動関連事業

- | | |
|-------------|----------------|
| (a) ながら運動 | (b) ボディメイク教室 |
| (c) 体力づくり教室 | (d) イベントでの啓発活動 |

平成 27 年度ゼミ学生地域貢献推進事業実績報告書

日本大学国際関係学部福井ゼミナール

松内香波、棚田美貴子、後藤晃希、玉澤信雄

指導教官； 福井千鶴

1. 研究課題

グローバル都市三島に必要なグローバル人材育成方策を究明する（指定課題：三島市）

2. 研究目的

三島市が推進しているグローバル人材育成事業に関連して、グローバル人材育成に密接に関連する国際関係学部のゼミと行政等が一体となり具体的な試行事業を企画し実施することにより、未来都市グローバル人材育成を目指した「大学のある文教都市」三島にふさわしい街づくりの推進について諸条件を究明し提言にまとめ、市政の推進に資することを目的とする。

3. 実施事業概要

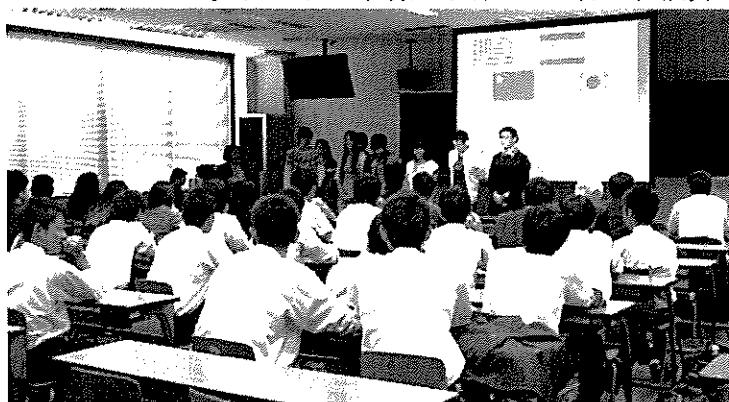
3. 1 実施事業概要

研究課題の実施方法について、研究目的を達成するために種々検討を行い次の事業を実施することとした。

3. 1. 1 三島市の国際化を推進するに必要な、また、グローバル人材育成に寄与する次の事業を福井ゼミナール主催、三島市グローバル人材育成都市推進ネットワーク会議と連携し実施した。

① 「4ヶ国語（中国語、韓国語、英語、スペイン語）を同時に学んで世界の窓を広げよう」と題して、市民、中高生・大学生向けの4ヶ国語をリズムに合わせて楽しみながら覚えるイベントを2回実施した。このプログラムは日本大学の福井ゼミナール生、海外からの留学生、三島市内や近隣に居住する外国人を講師にして実施した。参加者は、第1回約50名で、福井ゼミ生の音頭取りでリズム

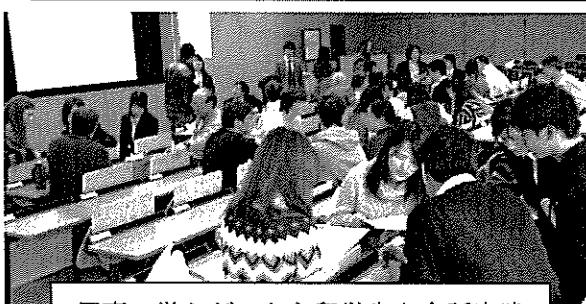
に合わせて、ここに挙げた4ヶ国語による挨拶や簡単な会話を留学生や講師の外国人に続いて発声し体感しながら、外国語に馴染むプロジェクトを実施した。



写真：第1回 4ヶ国語を同時に学ぶ



写真：第2回4ヶ国語を同時に学ぶ



写真：学んだことを留学生と会話実践



写真：留学生による出身地の紹介



写真：子供連れのお母さんも参加



写真：子供も上手に発音

このイベントでは、また、留学生や福井ゼミ生による、4か国に関連した国紹介を行い、海外の異文化理解講座も併せて実施した。

② グローバル人材の育成を啓発するため、海外で滞在し活躍の経験のある講師を招き海外体験話の講話を開催した。

1) 「スポーツと世界（南米サッカ一体験談）」 講師：南谷 光一（静岡

県サッカー協会評議員) 氏によるブラジルでサッカー関連の仕事で滞在した経験談の講演会を行った。現地の人々と人的な交流を行い、サッカーの発展



に寄与した。心を通わせお互いを知ることが海外で生活することが重要と話し、グローバル化の中でどのように外国人と接し、交流を深め生活をするかの良いアドバイスがあった。参加 約 50 名

2) 「コロンビアの大学で日本語教師体験談」 講師：田代 景子氏（日本大学国際関係学部福井ゼミナールOG）によるコロンビア・ノルテ大学にて2年間の日本語教師を務めた。コロンビアの生活や大学の先生として活躍し



た、まさに、グローバル人材育成プログラムの事例に相応しい、外国の大学での指導の在り方、日本語の普及活動、外国生活のノウハウなどについて、実際の体験を通して得たノウハウを話の題材として講演された。 参加者約 30 名

③ 留学生、外国人、講師を交えた交流会（カフェ）を実施

講師との交流、留学生や外国人との交流を深めることを目的に、講演会終了後、直接ブラジルから持ち帰ったブラジルコーヒーと福井ゼミナールが南米日系人と地域企業活性化



を目的に活動しているプログラムで、ブラジル・トメアス日系人移住地のトロピカルフルーツを素材にし開発したマドレーヌを試食しながら話が弾んだ。

写真：講師や留学生を囲み交流が進むカフェ

④ JICA 海外活動講演会の開催

グローバル人材の活躍の場を提供している独立行政法人国際協力機構（JICA）の海外活動を紹介する講演会を開催する。一般的には海外で活躍する場を提供する海外青年協力隊やシニアボランティアが良く知られている。JICAではこの他にも開発途上国の開発プロジェクトの推進、技術協力支援などを行っており、これに関連する専門家の海外派遣や専門家の研修などを行っている。また、海外の日系人の事業支援や日本の企業と中南米の企業の連携推進などを行っている。日頃、余り知られていないJICAの事業活動についての講演会を開催した。参加者43名

講師：JICA 中部国際センター 竹内康人次長、場所：三島市生涯学習センター3階講義室、2016年1月24日（日）。

講演内容；

1) 海外活動について

イランへの協力の事例を基に日本政府援助による開発プロジェクトの推進、技術協力の進め方や方法、現地での日本人専門家の活躍状況などについて具体的に説明され、海外活動について、日ごろ触れることのできない活動のありさまについて具体的な理解が得られた。

2) JICA の業務について説明

3) 政府援助・技術協力について

イランへの協力の事例を基に日本政府援助による開発プロジェクトの推進、技術協力の進め方や方法、現地での日本人専門家の活躍状況などについて具体的に説明され、海外活動について、日ごろ触れることのできない活動のありさまについて具体的な理解が得られた。

4) 中南米日系社会に対するJICAの支援・連携事業について

多くの日系人が中南米に移住し日系社会を築いている。JICAの移住事業と日系人社会の支援及び中南米との連携事業の支援などについて説明された。



写真；JICA 講演会
竹内次長の講演



3. 1. 2 多言語三島市観光パンフレットの制作

国際都市化を推進する三島市の外国人向けのサービスを向上し、来訪外国人観光客の増加策として、外国語によるパンフレットを作成する。

パンフレットは日本大学国際関係学部に留学している学生、三島市と近隣に在住する外国人の参加を得て、外国人が好みそうな観光スポットの発掘と紹介、既存の名所案内を外国人の目線で感じた興味視点を中心としたパンフレットの制作を進めた。今年度は英語、スペイン語、インドネシア語（理由として、福井ゼミ生にインドネシア系の日系人が居ることと、焼津などの漁業関係でインドネシア人が働いていることから採択）を制作することにした。韓国語、中国語等多言語については次年度を予定する。福井ゼミでパンフレット案を制作し印刷会社によりデザインと印刷の仕上げを行った。英語版パンフレットを示す。現地調査、写真撮影、外国人との共同作業等は福井ゼミで行った。



4. プログラム実施に対する協力

本プロジェクトの実施には三島市企画戦略部政策企画課のご協力を得て推進した。また、三島市の協力により広報誌でイベント開催の案内を行った。

5.まとめ

イベントを実施して感じた事と提言；

① グローバル人材育成は、海外で活躍する若者や三島市の国際化を推進する上で極めて重要で、日本政府の政策にも挙げられている課題である。関連イベントに興味を持ち多くの参加者を期待したが、あまり市民の参加者が集まらなかった。

このようなイベントへの参加者を如何にして増やすかが課題となった。興味を持つ人々に情報を届ける方策と関心を高める方策を考える必要性を感じた。

② 三島市に外国人の来訪者を増やすために外国人に興味を持ってもらう資源や手段の発掘と開発が必要であると感じた。

③ 市民の参加者は海外で活動した経験のある人が多くあり、このような人のコミュニティーを作り、コミュニティーを中心に啓蒙活動すると良いと思った。

④ もっと高校生の参加を広げる工夫をする必要ありと思った。

以上

「第1回目：4ヶ国語を同時に学んで世界の窓を広げよう」

【三島市グローバル人材育成都市推進ネットワーク企画連携事業】

【国際関係学部福井ゼミ・グローバル人材育成プログラム】

日時： 2015年11月22日(日曜日)

第1部 11時～12時30分(日大国際関係学部1512教室)
リズムに合わせて英語・スペイン語・韓国語・
中国語を楽しみながら覚えましょう。

第2部 13時15分～14時45分(1512教室)

講演会：スポーツと世界(南米サッカートークセッション)

講 師：南谷 光一氏(静岡県サッカー協会評議員)

4カ国の事情に触れてみよう

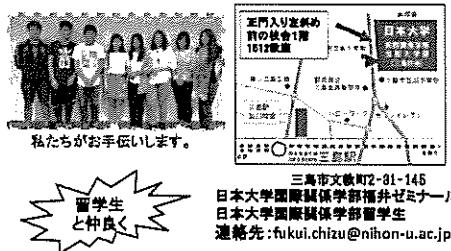
第3部 15時～18時(15号館6階パノラマラウンジ)

コーヒーブレイク(美味しいコーヒーと一緒に開発の

アマゾン・フルーツマドレーヌ)楽しむ教説しませう！

参加費 無料

事前にご連絡頂いた方にプレゼント贈呈



三島市文教町2-81-145
日本大学国際関係学部福井ゼミナール
日本大学国際関係学部留学生
連絡先:fukui.chizu@nihon-u.ac.jp

三島市グローバル人材育成プログラム

JICAの海外活動講演会

【三島市グローバル人材育成都市推進ネットワーク企画連携事業】

【国際関係学部福井ゼミ・グローバル人材育成プログラム】

日時： 2016年1月24日(日曜日)

13時30分～15時30分

場所： 三島市生涯学習センター 3階講義室

三島市大宮町1-8-38

参加費： 無料

対象者： 高校生・大学生・市民・企業の皆様

講演内容： JICA(独立行政法人国際協力機構)について

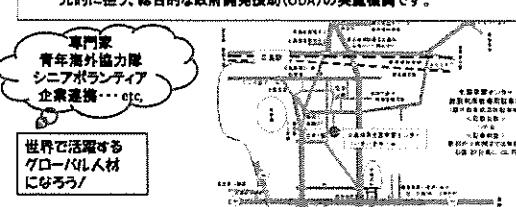
1. JICAの事業活動(海外活動について)

2. 専門家の海外派遣と研修について

3. 中南米の活動と日系人移住者支援、中南米との企業連携の推進

講師： JICA中部国際センター 次長 竹内廉人

* JICAは技術協力、有償資金協力(円借款)、無償資金協力の援助手法を一元的に担う、総合的な政府開発援助(ODA)の実施機関です。



日本大学国際関係学部福井ゼミナール
連絡先:fukui.chizu@nihon-u.ac.jp

4ヶ国語を同時に学んで世界の窓を広げよう

【三島市グローバル人材育成都市推進ネットワーク企画連携事業】

【国際関係学部福井ゼミ・グローバル人材育成プログラム】

日時： 2015年12月13日(日曜日)

第1部 11時～12時30分(日大国際関係学部1512教室)
リズムに合わせて英語・スペイン語・韓国語・
中国語を楽しみながら覚えましょう。

第2部 13時15分～14時45分(1512教室)

講演会：コロンビアの大学で日本語教師体験談

講 師：田代景子氏(福井ゼミナールOB)

コロンビア・ノルテ大学にて2年日本語教師として活

躍

第3部 15時～18時(15号館6階パノラマラウンジ)

コーヒーブレイク(美味しいコーヒーと一緒に開発の

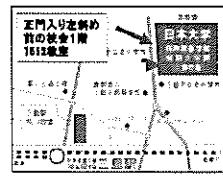
アマゾン・フルーツマドレーヌ)楽しむ教説しませう！

参加費 無料 事前にご連絡頂いた方にプレゼント贈呈



ノルチ大手日本語クラスの学生と
田代景子氏 日代先生

留学生
と仲良く



三島市文教町2-81-145
日本大学国際関係学部福井ゼミナール
日本大学国際関係学部留学生
連絡先:fukui.chizu@nihon-u.ac.jp

富士宮市の回遊性に関する研究

Have you ever experienced the hospitality of Fujinomiya?

~Let's enjoy walking along Fujinomiya Main Street~

常葉大学経営学部（富士） 大久保ゼミ 3年

指導教員：教授 大久保あかね

参加学生：森美緒、藤岡麻美、岩城和也、他 7名

1. 研究の背景と目的

富士宮市は平成 27 年度から世界遺産のまちづくり構想をスタートさせた。この構想は、賑わいある空間の実現をめざすもので、民間活力や経済が動くことが重視されている。民間が積極的に参加しやすい環境づくりの一つとして、街中に若者が「集う」こと、「行きたくなる」こと、「買い物したくなる」ことも重要な要素となる。世界遺産構成資産である富士山本宮浅間大社や計画中の「世界遺産センター（仮称）」などのような人を惹きつける素材が他市の中心市街地に比べても十分に備わっているにもかかわらず、商店街には人が滞留・回遊していないのが現状であり、大きな課題となっている。そこで、大学生の視点で中心市街地の調査を実施し、富士宮の新しい活性化の発想を探りたい。

2. 研究の方法

本研究は、質問紙による富士宮市のイメージ調査のほか、複数の市街地を対象とした「まち歩き調査」など、複数の実証的研究から構成される。以下にその詳細を記す。

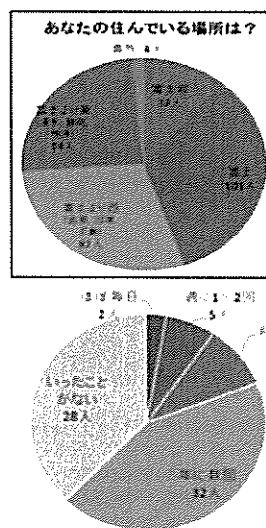
1) 富士宮のイメージに関する質問紙調査

■ 調査概要

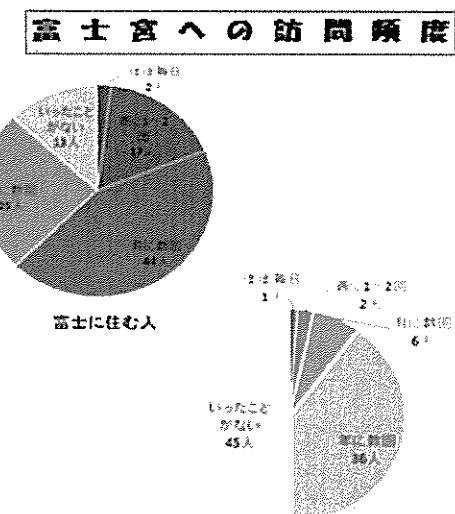
調査時期：2015 年 7 月

調査対象：常葉大学 富士キャンパスの学生 1 年～4 年

回収枚数：298 枚



富士より西(清水、静岡、焼津)に住む人



富士より東(吉原、沼津、三島)に住む人

■考察

質問項目は、居住地域を含む基本情報のほか、富士宮への訪問経験、訪問頻度、富士宮をイメージするキーワード（選択式）などとした。

富士・富士宮地区以外に居住している回答者の約40%が富士宮への訪問経験を持っていないことがわかつた。また富士より西に居住している回答者のほうが、訪問経験者の比率が高い。

また富士宮のイメージ（複数回答）は、富士宮焼きそばとの回答が80%、次いで富士宮イオンであり、世界遺産の登録資産である富士山本宮浅間大社や白糸の滝が30%未満であった。

イメージに関しては、学生を対象とした調査であり、知識の偏りが影響しているとも考えられるが、「街中に若者が集う」という目的に対して、厳しい現状が明らかになった。

【富士宮の印象について（複数選択式）】

| 順位 | 内容 | 回答数 | 回答率 |
|----|-----------|-----|-------|
| 1 | 富士宮焼きそば | 247 | 82.9% |
| 2 | 富士宮イオン | 131 | 44.0% |
| 3 | 白糸の滝 | 89 | 28.9% |
| 4 | 富士山本宮浅間大社 | 82 | 27.5% |
| 5 | まかいの牧場 | 76 | 25.5% |
| 6 | 朝霧高原 | 75 | 25.2% |
| 7 | 富士山 | 63 | 21.1% |

2) まち歩き調査① 富士宮市街地

■調査概要

調査時期：2015年7月10日（金）13:30～16:30

協力者：富士宮市役所

取材先：まるカフェ、Rihei、増田屋本店、HATOYA

参加者：常葉大学（富士）の学生1年～4年 28名

■考察

調査は、グループに分かれて商店街の中の指定された商店を探しだし、取材を行う形式で実施された。

富士宮のまち歩き調査に参加した学生から以下のような報告が挙げられた。

「良い点」

- ・道路が平坦で、なお且つまっすぐであり、歩きやすい商店街である。
- ・建物や道路が新しく、景観として美しい。
- ・インタビューをした際に、店の人が優しく、丁寧な回答に好印象を持った。

「悪い点」

- ・人どおりがなく、地元の人も歩いていない雰囲気を感じた。
- ・シャッターが閉まっている店があり、閑散とした印象を持った。
- ・店の扉が閉まっているため、商店への「入りさにくさ」を感じた。

以上のように、取材した際には、店の人の暖かみを感じたり、物理的には商店街が歩きやすく整備されている一方で、人通りがなく富士宮商店街の回遊性の低さが浮き彫りになった。



写真1. 富士宮街歩き調査での取材風景

3) まち歩き調査② 热海市街地

■調査概要

調査時期：2015年8月31日（日）

参加者：常葉大学（富士）の学生1年～3年 23名

■考察

調査はあらかじめ指定された熱海のスポット20箇所を、写真をヒントに探すこと。また、富士宮での街歩きとの比較をすることが課題として与えられた。

熱海のまち歩き調査に参加した学生から、以下のような報告が挙げられた。



写真2. 热海まち歩き調査の一場面

「良い点」

- ・人が多く、町全体に活気が感じられた。
- ・お店の扉がなく、開放的で入りやすく感じた。

「悪い点」

- ・坂道が多く、歩道にも傾斜があり、歩きづらさを感じた。
- ・歩道と車道の間が狭く、自動車に接触しそうで危険である。

以上のように、熱海のまち歩き調査での印象は、富士宮より賑わいを感じたものの、地形の関係で道路の傾斜や歩道の狭さなど、安心して歩く環境ではないことが指摘された。



4) 観察調査：静岡県内の商店街のにぎわい度調査

■調査概要

調査時期：11月11日（水）

調査方法：ゼミナール学生が各地域に分散し、

写真3. 県内各市街地の回遊状況

平日の同日時間帯に静岡県内の複数の市街地における回遊状況を写真撮影し、徒步回遊している消費者のモニタリングを実施した。

■考察

静岡市の繁華街であっても、撮影できた人数は13名と、予想よりもかなり少ない結果となつた。

この調査から、静岡県内のどの地区においても、特に平日は人が少なく、商店街に人を集めることは容易ではないことを感じた。

5) 先進事例調査① 三島市：スマートウェルネス事業

| | 本町通り (富士宮) | 富士本 町 (富士) | 新富士 駅 (富 士) | 新静岡セ ノバ (静岡) | れんが道商 店 街 (藤枝) |
|------|---------------|------------------|----------------------|--------------------|-------------------------|
| 男 | 0 | 0 | 3 | 7 | 1 |
| 女 | 1 | 1 | 3 | 6 | 3 |
| 子ども | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 学生 | 0 | 0 | 2 | 1 | 3 |
| 大人 | 1 | 1 | 4 | 12 | 1 |
| お年寄り | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 |
| 総人數 | 1 | 1 | 6 | 13 | 4 |

■調査概要

時期：2015年10月13日

講演：健康づくり課 柿島淳氏

■講演内容及び考察

三島市は県内健康寿命一位である。その理由は、温暖な気候と健康運動。それを活かした「三島に来て健康！」という概念で「スマートウェルネス三島」という事業を展開している。

これは、①健康寿命を延ばす健康づくり ②生涯を通じて社会参加・地域交流できるまちづくり③持続可能な健康都市づくり、という3つの取り組みを中心にして行う健康活動が「スマートウェルネスみしま」である。その結果として、三島が健康活動を通じて、交流・訪れたい場所になることを目指したものである。

事実、市内各所に設置した計測器や、㈱タニタと共同開発した低カロリースイーツなどの仕掛けによって、市内を楽しみながら回遊する人が増えている。

のことから、商店街などを回遊するためには、歩くための目的が重要であることが分かった。

6) 先進事例調査② 愛知県岡崎市および豊川市：岡崎「まちゼミ」と門前町活性化

■日時：2015年1月5日

取材先：岡崎まちゼミの会事務局

参加者：常葉大学の学生2年・3年 12名

■取材内容と考察

・岡崎市「まちゼミ」：堺康弘氏による講話

まちゼミとは、岡崎市の中心市街地の商店街のお店の人々が講師となり、プロならではの専門的な知識や情報、コツを無料で受講者「お客様」にお伝えする少人数制のゼミである。また、「お客様」「お店」「地域」の三方よし活性化事業である。店の存在や特徴を知っていただくとともに、お店とお客様のコミュニケーションから信頼関係を築くことを目的としている。

まちゼミは「お店の中に入らうきっかけ作り」として行われており、そこから店主や店の「新しいファンをつくり」をすることだと学ぶことができた。また、まちゼミを通して、商店街の強みの一つである「繋がり、連携」を築いているのだと感じた。

・豊川稲荷商店街：まち歩き調査

日本三大稲荷のひとつ豊川稲荷の門前町商店街は、「住民によるソフト先行のまちづくり」を目指す「いなり楽市実行委員会」が中心となり、「できることから始めるまちづくり」に着手し、「いなり楽市」（3月～11月の第4日曜に開催）では、「元気軒下戸板市」



と称し、各商店が店頭で戸板を台にして出品する自由市や、レトロな商店街の復活を行うなど、費用のかからないまちづくりを行っている。

豊川稲荷商店街に「ようこそ！豊川」「歓迎豊川稲荷」となど歓迎する言葉が書かれた狐の置物やレトロな看板などが魅力的だった。また「店に入りやすそう」「活気がある」という意見が多くた。1月5日であり、初詣客が多い時期であったこともあるが、お店の方が声掛けや、店に扉がなく、オープンで中に入りやすく感じたことが影響していると感じた。

3. 調査の結果とまとめ

本研究を通して、様々な方から意見をいただく機会があった。特に12月に開催されたふじのくにアカデミック&サイエンス・フェアにおけるポスターセッションの際に、指摘された言葉が印象的だった。

商店街は、地元の人にとっては「いつでも行ける場所であるだけに、わざわざ行かない場所でもある」という言葉である。買い物の便利さだけを考えると、大型駐車場のあるショッピングモールが選択されるのはやむを得ない。また、商店街の「にぎわい」を考えればイベントを開催することも必要である。

本研究を通して改めて、「商店街の各店舗が目的地」になることの重要性について考えることになった。その点では、岡崎まちゼミで展開されている「まちゼミ」が展開する「店主のファンを作る」活動が有効であるように考えられる。例えば、私たち学生が買い物をするときでも友人がアルバイトをしているお店を選ぶ、ということがある。また、シフトの関係で友人がいない場合は、買い物もしないこともある。結局、「モノ」ではなく「人」で選ぶという経験は、誰しもしているのではないか。

先進事例の調査対象となった、各地の商店街や市街地から感じられたのは、街の人々が同じ目標を共有している団結力や協力体制である。

本年度の調査から、富士宮商店街への提案として考えたプランのひとつが、「老舗の若旦那めぐり」である。残念ながら、1月時点で企画を実現させることができなかつたが、次年度以降、商店街の魅力的な「人」を発掘し、あの人に会いたいと足を運んでいただけるような企画を実施したい。

謝辞：本調査にあたり、富士宮市企画部未来企画課芦澤様をはじめ、三島市健康づくり課柿島様、株式会社岡崎まちづくり堺様など、多くの皆様にご指導いただきました。ここに改めて感謝申し上げます。

以上

ワーク・ライフ・バランス推進施策の調査・研究・提案*

国立大学法人静岡大学 男女共同参画推進室

指導教員： 特任准教授 的場啓一

参加学生： 細井望、松本恵理、青島誠人、日下部弘明、

櫻井勇太、渥美健志、宿島幹人、川合麻友、

前田祐理

1 要約

ワーク・ライフ・バランス（仕事と生活の調和）の実現は、個人の豊かな生活の実現、少子化対策、男女共同参画、企業等の生産性向上など様々な視点から重要性が指摘され、国・地方公共団体でも取組が行われています。このように多様な視点から重要性が指摘されているワーク・ライフ・バランスの実現を目指し、島田市地域生活部地域づくり課の職員と静岡大学男女共同参画推進室のワーク・ライフ・バランス研究チームが、事業所へのヒアリング、8回のワークショップ、アンケート調査を通じて共同研究を行いました。

アンケート調査からは、島田市内の事業所では、人間関係は悪くはないが、従業員は仕事に偏った生活をしており、私生活が軽視されていることが分かりました。また、ワーク・ライフ・バランスに関する認知度は、女性より男性の方が高くなっていました。さらに、利用しやすくして欲しい制度として、連続休暇、リフレッシュ休暇を希望する者が多く、仕事から解放されて自分の時間を確保したいという思いが現れています。

ワークショップ形式によりブレーンストーミングを用いて検討を重ね、仕事量を削減し、休みやすい環境を整え、仕事に偏った生活を変えていくための働き方の改革について次の3点を提案しました。

- ① 休暇制度の充実（新たな休暇制度創設と計画的休暇取得）
- ② 見える化の推進と残業の削減
- ③ コミュニケーションの活性化（「飲み会」と「LINE」の活用）

2 研究の目的

わが国における働き方には、慢性的な長時間労働による生活の質の低下や仕事と出産・子育て・介護との両立が困難であるという課題があります。このような課題を抱えたままでは、少子高齢化や人口減少といった時代の変化の中で、個人の生活だけでなく、事業所が組織を持続していくことも困難な状況に陥る恐れがあります。

個人にとっては出産・子育てや介護を始め、仕事以外の活動にも責任を持ち、時間を費やす必要が増えており、ワーク・ライフ・バランスの実現は働く人々が心身ともに健康であるために必要とされています。

また、事業所にとっては、人材の獲得をめぐる競争は今後激しさを増していくと予想され、働く環境を整備することは事業所が成長していくために必要なこととされています。特に若年層の人材獲得や定着、働く意欲や能力のある人材の活用の重要性は高まっています。

長時間労働により個人が健康を害することは、本人のみならず事業所にとっても深刻な問題となります。個人の心身の健康が維持できる就業環境を提供するとともに、意欲や満足度を高めることで優秀な人材を確保し、定着させることが事業所に求められています。

* 本研究に対して財政援助をいただいた公益社団法人ふじのくに地域・大学コンソーシアムに感謝申し上げます。また、研究テーマを与えてくださった染谷綱代島田市長、調査・研究にご参加いただき、貴重なご助言、ご示唆をいただいた島田市地域生活部地域づくり課の渡辺課長をはじめ職員の皆様、企業における取組等をご教示くださいました島田信用金庫及び丸尾興商株式会社、アンケートにご協力くださいました皆様方に心より御礼申し上げます。

このような中、本研究では、近年ワーク・ライフ・バランスへの意識が高まっている島田市において、市内企業・事業所の95%が従業員30人以下である状況を踏まえたワーク・ライフ・バランス推進施策について、学生の新鮮な視点を交え、調査、研究を行い、新たな施策の提案を目的とします。

3 研究の内容

本研究は静岡大学男女共同参画推進室ワーク・ライフ・バランス研究チームと島田市地域生活部地域づくり課とのワークショップにより研究する方式をとりました。市内事業所の労務管理者と従業員に対するアンケート調査を行い、島田市におけるワーク・ライフ・バランスの現状を知ることができました。また、島田信用金庫様、丸尾興商株式会社様へのヒアリングを行い、企業における先進事例を伺うだけでなく、それを活かすための社内風土等についても学ぶことができました。

具体的な提案内容に関する検討は、9人の学生が3つのグループに分かれ、各自の意見をぶつけ合いながら、ＩＣＴも駆使して、提案内容をまとめるとともに提案資料の作成を行いました。

4 研究の成果

(1) 当初の計画

ワークショップ形式により島田市地域生活部地域づくり課の職員を交えて、概ね以下のスケジュールで行政と連携して研究を行う計画としました。

- ・ワーク・ライフ・バランスの現状分析（7月）
- ・ワーク・ライフ・バランス実現の環境整備の検討（8月）
- ・市内企業、自治体の取組事例の評価・検討（9月）
- ・新たな施策の提案（10月）
- ・効果的な意識改革の手法の検討（11月）
- ・市長への施策提案（12月）

(2) 実際の内容

ワークショップ形式により島田市地域生活部地域づくり課の職員を交えて、ブレーンストーミングを用いて、出来る限り多様な意見を出し合いながら、議論を繰り返しました。検討内容が、進んだり、後退したりすることもありましたが、時間をかけて意見を交わしました。

具体的なワーク・ライフ・バランスを推進するための提案内容については、メンバー9人が3人ずつ3グループに分かれ、内容を煮詰めていきました。調査・研究の実際の進行は、以下のようになりました。

- ・ワーク・ライフ・バランスに関する研究（理解を深める）（7月～8月）
- ・企業の取組事例についてヒアリング調査（8月）
- ・市内企業へのアンケート調査（9月～10月）
- ・職場環境、人間関係、意識改革など新たな施策の検討（10月～12月）
- ・研究、調査、検討内容のまとめ（12月～1月）
- ・島田市への施策提案（1月）

(3) 実績・成果と課題

本研究チームのメンバーが集まっての議論は、静岡大学静岡キャンパス内の多目的保育施設「たけのこ」で行いました。また、3つのグループは、グループ単位で静岡大学静岡キャンパスやグループメンバーが集まれる静岡市内で個別に検討を行いました。さらに、島田市地域生活部地域づくり課の職員を交えたワークショップは、島田市役所の会議室や島田市総合施設「プラザおおるり」で計8回（7月23日、8月28日、10月7日、10月26日、11月19日、12月10日、12月22日、1月8日）

行いました。

3つのグループの提案内容は、次表のとおりです。

| | |
|--|---|
| <p>A グループ</p> <p>細井 望 櫻井 勇太 宿島 幹人</p> | <p>働く者にとって家庭生活を大切にするための時間確保策として休暇制度の活用がありますが、島田市の実態は、有給休暇取得率が全国平均よりも低い状態となっています。</p> <p>また、島田市で働く人達は、連続休暇やリフレッシュ休暇などの休暇制度を利用しやすくして欲しいと願っています。</p> <p>さらに、今後充実させたいこととして、家族団らん等の家庭生活、家族のための家事・育児が多くなっています。</p> <p>このようなことから、「休暇制度の充実」と「制度利用を可能にする環境整備」について提案します。</p> |
| <p>B グループ</p> <p>松本 恵理 青島 誠人 渥美 健志</p> | <p>A グループの提案を受け、休暇を取りやすくするための方法を検討しました。</p> <p>休暇を取れば、休んだ人の仕事を誰かが行う必要があり、代替人員の確保が問題となります。島田市でも、代替人員の確保について、約半数の人が確保されていないと感じていました。この問題を解決するために「見える化」を提案します。</p> <p>また、「見える化」の波及効果として、残業に対する新たな取組も考えられます。島田市では、約4割の人が、時間内に仕事が処理しきれない、終業後も多くの人々が残っていると感じています。</p> <p>「見える化」による「希望制による残業」「残業のワークシェア」も提案します。</p> |
| <p>C グループ</p> <p>日下部 弘明 川合 麻友 前田 祐理</p> | <p>A、B グループの提案内容を実現し、円滑に機能させるための条件として「組織内のコミュニケーション」があります。</p> <p>島田市の実態では、職場における人間関係は悪くはなく、良いと感じている人が多くなっています。</p> <p>しかし、WL B を充実させるためには、組織内のコミュニケーションをもっと円滑にすべきであると考えます。</p> <p>コミュニケーションツールは多くありますが、日本の伝統的な「飲み会」の活用と最新 I C T の利用を検討しました。</p> <p>「若者の飲み会離れ」と言われますが、若者が参加しやすい新しいスタイルの「飲み会」と「LINE」を使用したコミュニケーションの円滑化と情報共有を提案します。</p> |

以上が提案の内容ですが、この提案をまとめる過程で島田市内の企業で働く者を対象としたアンケート調査を実施しました。これにより、島田市の労働者の実態を把握することができました。これまで調査の必要性が指摘されながら実施に至っていませんでしたが、今回の研究で実現できたことは大きな貢献といえます。また、学生と島田市職員とのワークショップは、相互啓発により、学生の視野拡大と若者の発想に触れることによる市組織の活性化につながったといえます。

しかし、社会人経験のない学生が議論するには、本研究のテーマは難しいものがありました。また、

本提案は新たな発想や若者の発送を重視しているため、既存政策との整合性や費用対効果などの点では検討が不十分であると考えられます。さらに、ブレーンストーミングを用いたワークショップでは、働き方の改革に向けた多くのアイデアが出されました。島田市へ提案した内容は3点のみで、半年かけて議論した内容の一部となっています。今回の研究では、時間的な制約もあり、提案内容を現実に実施する場合の課題や法的な整合性などの研究と検討が不十分といえます。

今後の課題としては、今回提案した内容を企業の現実の場で実施していく際の課題や工夫に関する検討があります。また、ワークショップで出された多くのアイデアについても、実現可能性や実施に向けた方策の検討が課題として残っています。さらに、島田市内の企業で働く労働者を対象としたアンケート結果の詳細な分析と活用が課題としてあげられます。

(4) 今後の改善点や対策

上で述べた今後の課題に対して、引き続いて調査・研究を行いたいと考えますが、今回研究に参加した学生の後輩に今回の研究内容と今後の課題を引き継ぐことも視野に入れ、可能であれば島田市地域生活部地域づくり課の職員とも連携して検討を進めていきたいと考えています。

また、今後同様の調査・研究を行う場合には、同一学年の学生だけではなく、異なる学年の学生をメンバーに加え、順次下位の学年の学生が研究を引き継げる体制を整えておくべきと考えます。

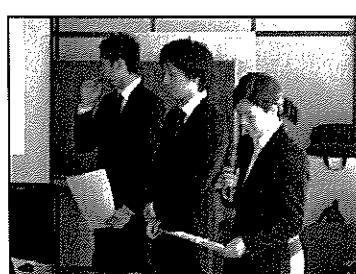
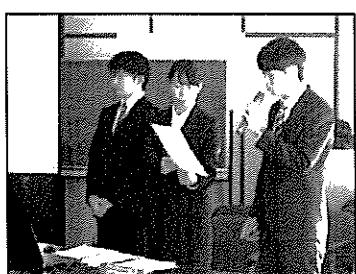
5 地域への提言

今回の研究では、上で述べたように3つのグループで3つの提案をしました。これらは、企業での働き方、仕事・作業のやり方、企業風土といったものに関係するものです。中小企業が多い島田市では、中小企業の利点の一つとして考えられるフットワークの軽さを活かせば、提案内容の中には、各企業で即応できるものもあると考えます。

そのような企業の取組を促進させるために行政には、今回の提案内容を広く広報していただくことを希望します。また、ワーク・ライフ・バランスの推進が企業と個人にとってメリットをもたらすものであることも併せて広報、周知いただきたいと考えます。

さらに、今回は検討できませんでしたが、企業におけるワーク・ライフ・バランス推進にために行政が行うべきことについて、研究と検討を進めていただきたいと考えます。

今回の提案は、まだまだ荒削りの内容ですが、学生らしい斬新さ、大胆さが含まれた提案であると考えています。本提案を島田市政に活かしていただければ幸いです。



6 地域からの評価

島田市役所において、平成28年1月14日（木）に島田市長をはじめ幹部職員の方々にお集まりいただき、今回研究してきた内容を発表しました。島田市内で働く労働者の意識や職場の実態が分かったこと、これから社会人になる若者の考えが分かったことなど、高い評価を得ました。また、今回の提案内容を市政運営に活かし、島田市内で働く者を取り巻く環境整備と産業活性化等に活かせるよう、行政としても検討したいとのことでした。

研究課題報告書

富士市「事業所の製品・サービスの改良・改善・販路拡大等に関する調査・研究」

静岡大学 全学教育科目「地域連携プロジェクト型セミナー（学部共通1）」

ゼミ学生：松田真由子（教育学部）・袖野衣織（人文社会学部）・

鈴木志穂美（人文社会学部）・小泉愛（理学部）・

松永好未（農学部）・古谷風沙（農学部）

指導教員：坂井敬子（大学教育センター）

プロジェクトの背景と目的

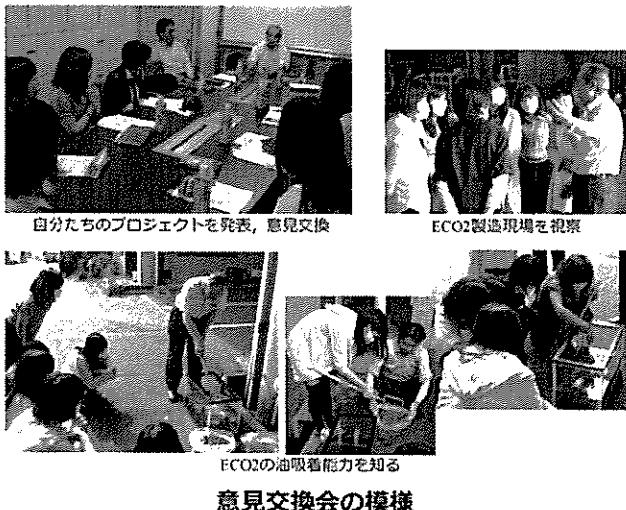
本プロジェクトは、松岡紙業株式会社、富士市、ならびに静岡大学が連携する製品マーケティング事業「TEAM FES」を基礎にしている。松岡紙業株式会社から与えられた課題は、油吸着材「ECO2」の販路拡大である。静岡大学における全学教育科目「地域連携プロジェクト型セミナー」（2015年度前期開講）がその実施機会と設定され、学部や学科の異なる6名の学生が課題に取り組んだ。

松岡紙業株式会社の油吸着材「ECO2」は、静岡大学農学部との共同研究を経て誕生した素材で作られており、古紙を原料としている。飲食店厨房などのグリストラップ（業務用排水マス）に設置されてその効力を発揮する。グリストラップの中で油はECO2に吸着されることから、排水の水質は大幅に改善される。吸着されるのは油分だけで水分ははじかれるので、日々のグリストラップ清掃は非常に簡単になる。また、この製品の原料となる古紙は天然繊維とワックスからできているので、焼却処分が可能である¹。

これまで ECO2 は飲食店などの業務用に販売されてきたが、上記に挙げた「環境に良い」特徴を踏まえれば、一般家庭を新しいターゲットにすることで販路が拡大すると考えられる。環境省の「環境問題に関する世論調査」によると、多くの人が、食品を捨てないようにする、詰め替え製品を使う、レジ袋はもらわないなど、環境によいことを意識し実践しているという²。このことは、「環境に良い」ということが一般の消費者にも訴求力を持ち得ることを表すだろう。

一般家庭において ECO2 を使用する場所は、戸建ての排水ますである。入れておくだけで ECO2 が油やごみを吸着してくれる。時期を見て取り出し、燃えるゴミとして捨てるだけよい。

家庭の排水は排水マスを経て下水道に出ていく仕組みになっており、定期的に掃除をすることが富士市でも奨められている。しかし、松岡紙業株式会社や富士市の担当者からお話を聞くと、排水マス自体があまり認知はされておらず、掃除が必要だという認識も薄いようである。



そこで、本プロジェクトでは、ECO2 の新たな販売ターゲットを戸建ての家庭とし、普及をさせることを念頭に置いて、下記の 2 点を目的とする。
 ①一般家庭を対象にしてアンケート調査を行い、環境意識や排水マス掃除の状況を知る。②一般家庭での ECO2 の認知度を高めるための提案を行う。

環境意識や排水マス清掃状況を見る アンケート調査の実施

本調査は、富士市職員の方を対象とした。文書で協力呼びかけをいただいた。回答は Web システムを使用。実施時期は 2015 年 6 月。総回答数は 428 件であった。調査内容は、年代・性別、住居形態（集合住宅／一戸建て）、排水マスの認知有無、排水マス掃除経験、掃除をしない理由、掃除の方法・時間・頻度、排水マスを掃除しないことの影響として考えること、一般的な掃除用具を選ぶポイントであった。

ここでは、提言につながる結果のみをとりあげる（調査の全結果は、静岡大学 Web サイトに掲載³⁾）。

商品の特性に関わる調査結果

全ての人の掃除用具を選ぶポイントをみたところ、最も多く挙げられたのが使いやすさであり（9 割弱）、次いで、価格と機能性（ともに 7 割弱）であった。ECO が家庭の排水マスに使用されるときには、業務用と同様に、「入れておくだけ」でよいという使いやすさがあり、水をはじき油や汚れを吸着するという機能も高い。価格についても手軽であるので、ECO2 は消費者の志向に合う強みを充分に持っているといえる。

排水マス掃除経験のある人の掃除方法をみたところ、最も多く挙げられたのがひしゃくなどで油やごみをすくい取るという方法で（8 割）、他の選択肢を圧倒した。ひしゃくなどでは水も同時にすくうことになるので、水をはじく ECO2 の特性が強いアピールポイントになるだろう。

商品の売り方にかかわる調査結果

一戸建て居住者の排水マスの認知と掃除経験の有無をみると、40～60 代で掃除をしたとのある人が半数以上であり、排水マス自体を知らなかつたという人は 2 割強であった。30 代では掃除経験のある人が 3 割強、知らなかつた人は約 4 割であった。20 代では掃除経験のある人が 1 割強、知らなかつた人は 6 割強であった。このように、若い年代ほど掃除

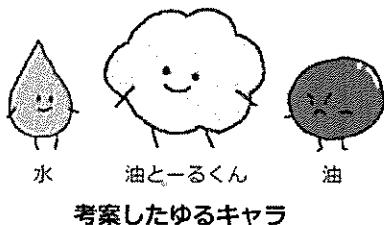
をしたことがない、知らない人が多いという傾向が見られた。このことから、若い年代も興味が惹かれる製品にする方策が必要である。

排水マスの掃除経験のない人の、掃除をしない理由をみたところ、最も多く挙げられたのは、掃除の仕方がわからないということだった（4割）。そこで、掃除方法をわかりやすくする広報の工夫が必要である。

排水マス掃除経験のある人の掃除回数をみたところ、1年に1回未満と答えた人が4割、1年に1~2回は5割弱、1年に3回以上は1割強であった。そこで、夏と年末の年2回の売り出し時期を設定するのが効果的だろう。

一般家庭でのEC02の認知度を高めるための提案

ゆるキャラ「油（ゆ）とーるくん」の提案



考案したゆるキャラ

まず、若い人に親近感を持ってもらえる製品にするには、ゆるキャラの設定が有効だと考えた。そこで、「油（ゆ）とーるくん」というゆるキャラを考案した。ネーミングは、製品の機能の伝わりやすさを考慮したものである。また、消費者に製品の特質をより詳しく知ってもらい、使い方のイメージも持ってもらうために、

油と水を表すサブ的なキャラクターも設定、EC02が水をはじき油を吸着、そのまま燃えるゴミに捨てられることを表す簡単なストーリーも作成した。

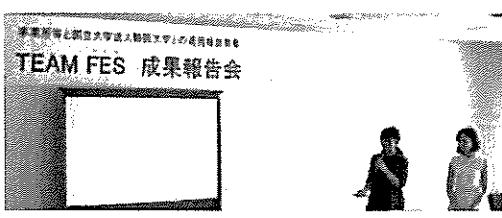
「油とーるくん」の売り方の提案

松岡紙業株式会社は古紙問屋であり、「こしのえき」というリサイクルステーションを神奈川から浜松のエリアに約100箇所設置している。これが、「油とーるくん」の販売所としてメリットを持つのではないだろうか。リサイクルステーションに足を運ぶ人は環境への意識が高いと考えられるため「油とーるくん」を高く評価してくれるだろう。「こしのえき」は24時間365日開設され無人のこともあるため自動販売機の設置も考えなくてはならないが、電力消費をしない「がちやがちや」式であれば、「環境に良い」という製品のイメージにも合う。

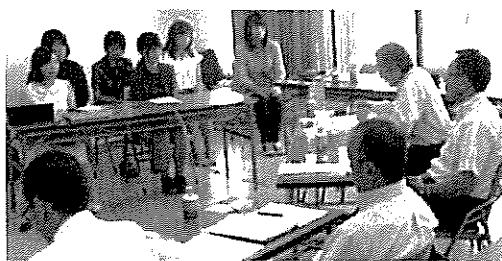
SNSでの情報発信の提案



会の冒頭、富士市長よりご挨拶



自分たちの成果と提案を発表



発表後、履修者全員で質疑応答と意見交換

成果報告会の模様

松岡紙業株式会社の Web サイトは見た目にも美しく内容も充実しているが、一般消費者が検索して見ることはなかなかないだろう。そこで、一般消費者へのアプローチ方法として、SNS の活用を提案したい。

調査結果から考察したように、夏と年末の年 2 回の売り出しが効果的と考えられるため、それぞれの季節に応じた情報更新が必要となる。また、これまで業務用に数々制作されてきた、EC02 の使い方を解説する動画があるので、そのノウハウを活用し、一般家庭での「油とーるくん」の使用方法を解説する動画をアップロードすると目につきやすくなると考えられる。

プロジェクト終了後の展開

上記に示した調査結果と提案は、平成 27 年 8 月に富士市役所での「TEAM FES 成果報告会」にて発表され、これを以てゼミ生のプロジェクトは終了した。

11 月には、新たな展開として、富士市環境フェアで、松岡紙業株式会社が本プロジェクトのプロセスと成果を展示報告してくださった。同社ブースでは、ゼミ生の考案した

新しい製品名やゆるキャラがアピールされた。製品を試行する一般家庭のモニターの募集には、目標を上回る数の登録があったとのことである。



富士市環境フェアでの展示

資料

- 1 松岡紙業株式会社 Web サイト <http://www.matuoka-shigyo.jp/>
- 2 環境省 2012 「『環境問題に関する世論調査』の結果について」
<http://www.env.go.jp/press/15543.html>
- 3 静岡大学大学教育センター「地域連携プロジェクト型セミナー」
<http://web.hedc.shizuoka.ac.jp/career/?p=898>

謝 辞

本ゼミ活動の基盤となった TEAM FES 関係者のみなさまには、多大なるご協力とご助言をいただき、学生の活動を支えていただきました。また、富士市職員のみなさまにはお忙しい中アンケートにご協力をいただき、学生の提言に大きな示唆をいただきました。心より深く感謝申し上げます。